様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：１３９０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６３７０６０５

研究課題名（和文）外国にルーツを持つ子ども達への就学前支援モデルの構築－各機関の連携に向けて－

研究課題名（英文）Development of a pre-school assistance model for pupils with international backgrounds

研究代表者
川口　直巳（Kawaguchi, Naomi）

愛知教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：６０５０９１４９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、外国にルーツを持つ子ども達のへの就学前からの継続した支援の支援モデルの構築を目指し、大学、保育園、公立小中学校、ブラジル人学校との連携を進めた。
　ブラジル人学校と愛知教育大学の学生の交流をした結果、ブラジル人学校の児童生徒と愛知教育大学の学生の両方に意識の変化が見られ、お互いの理解につながった。また、保育園での活動から、ボランティアに参加した学生が園児の語彙の低さを目の当たりにしたことにより、就学前支援の重要性の理解につながった。この活動から、活動集と教材の作成に至った。
　最終年度に行ったシンポジウムでは、連携の報告を行い、今後の連携の在り方に向けて議論することができた。

研究成果の概要（英文）：In this project, we set out to develop a model to continuously assist pupils with international backgrounds from pre-school onwards in collaboration with universities, nursery schools, public elementary and junior high schools, and Brazilian schools.
As a result of Aichi University of Education students interacting with Brazilian school pupils, changes in awareness were observed in both groups, which led to mutual understanding. Furthermore, through discovering nursery school children's small vocabulary size, the university student volunteers understood the importance of pre-school assistance. This led to the creation of an activity collection and teaching materials.
At the symposium in the final year of the project, we were able to report on various collaborations and discuss what form future collaborations should take.

研究分野：日本語教育

キーワード：外国にルーツを持つ子ども達　就学前支援　ブラジル人学校　保育園　連携

１．研究開始当初の背景

外国にルーツを持つ子ども達の中には、日本での滞在長期化や定住化の傾向が進んだ結果、日本生まれや幼少期から滞在している子ども達も非常に多い。それにもかかわらず、小学校入学後に教科学習が困難となる子ども達が多く、高校進学が大きな壁となっているのが現状である。より早い時期からの支援が必要と思われる。これまでの就学前の支援は、就学前のプレスクールの実施など、短期間での支援にとどまっており、就学前からの継続した支援モデルの構築が急務であると考えた。

２．研究の目的

本研究は、これまで就学前支援として行われてきたプレスクールのような短期間の支援にとどまることのない保育園や幼稚園での継続的な支援の実施には、何が必要であるかを明らかにする。そして、まだ手付かずと言ってもいい就学前から学童期にかけての長期間の継続した支援モデルを構築することを目的とした。そのためには、就学前（保育園や幼稚園）の機関だけに着目するのではなく、幼少期から学童期にかけて、各機関が連携することが必要となる。本研究では、日本社会において「成長する子ども達」を念頭においた、幼少期から学童期までの外国にルーツを持つ子ども達に関わる様々な機関が連携した支援体制を整えることを目指した。

３．研究の方法

本研究の方法として下記の４の方法を主にとった。

（１）ブラジル人学校との交流

ブラジル人学校の児童生徒や教員と愛知教育大学の学生が交流し、お互いの理解を深めることで、交流に関わった学生とブラジル人児童生徒の意識変化の観察を試みた。

（２）ブラジル調査

2010 年から継続して行っているブラジルに帰国した子ども達の語彙調査、子どもと家族へのインタビュー調査から、彼らのライフスタイルの変化の様子や日本語とポルトガル語、両言語における語彙力の変化を調査した。

（３）勉強会の実施

主に幼児教育選修に在籍する学生を対象とした勉強会を実施し、これまで幼児教育選修の授業では具体的に取り上げられなかった外国人園児の言語能力の問題を共有し、実際に保育者となった時にどのような活動ができるかをワークショップ形式で行うことにより、学生の意識変化を観察した。

（４）保育園での活動

外国にルーツを持つ子どもが多く在園する保育園での活動から、参加したボランティア学生の観察、保育園との連携を試みた。

４．研究成果

本研究の成果として、下記３つをあげることができる。

（１）意識変化

合計 6 回の交流のうち、最初の 2 回の交流は、愛知教育大学の学生がブラジル人学校を訪問し、授業見学や子ども達との交流、日本語の授業を実施するという交流であった。学生達は、これまで自分が経験したことのない学校文化を見て、日本の学校との違いを感じることができた。2 年目からの交流は、ブラジル人学校の児童生徒を愛知教育大学の大学祭に招待し、愛知教育大学の学生が学祭を案内したり、ステージ参加（ダンス）してもらうというスタイルをとった。ブラジル人学校の子ども達は、学祭に向けてダンスの練習を行い、自分たちが日本の大学の学祭を見学するだけでなく、参加するということで、日本社会へ関わるという意識を高めることができたようだ。これは、日本において、ブラジルコミュニティの中で生活している彼らにとって、日本の社会に参加するという、大変貴重な機会となった。ブラジル人学校の中

には、いじめ等の問題から、公立の学校に通えなくなった子ども達がいる。こうした子どもたちは、日本へのマイナスイメージをもっていたが、実際に日本人のボランティア学生に触れたことにより、イメージの変化が観察された。ボランティア学生は、自分たちが学祭を案内し、もてなすということで、どうしたらブラジル人児童生徒が楽しんでもらえるかを自ら考え、実際に子ども達が楽しんでいる様子を見たことで、最初の様々な戸惑いから喜び、やりがいへと意識の変化が見られた。

合計6回行った交流をブラジル人学校での交流（4回）と愛知教育大学の学祭に招待（2回）するという、双方向からの交流スタイルをとったことにより、交流の実施前と後にボランティア学生とブラジル人児童生徒の両方において意識の変化を観察することができた。ボランティア学生においては、日本社会における外国人児童生徒に関わる様々な問題に自分の意識が向くようになったり、さらには、将来教壇に立った時にどうあるべきか考える様子が観察された。ブラジル人児童生徒達においても日本や日本人へのイメージの変化が見られた。

（2）帰国生徒のライフスタイルと言語能力の変化

日本滞在経験のある子ども達に日本語とポルトガル語の語彙調査を行った結果、日本語とポルトガル語の語彙力の変化に様々なパターンが見られた。帰国当初の日本語の語彙力を維持している生徒は一人もおらず、全員がポルトガル語の語彙力の増加が認められているが、日本語の日常会話力に限っては維持できている生徒とそうでない生徒がいた。

また、生徒と家族へのインタビュー調査からは、長期に渡り調査を行った結果、日本での生活を振り返り、日本滞在中の自分自身の状態やブラジルに帰国した当時の自分の気持ちを客観的に捉えている様子が観察できた。日本人のマナーや日本人の行動、考え方などを今自分が生活しているブラジル社会と比較して、いいこと悪いことなど客観的に評価している様子、自らが日本とブラジルの両方の文化を体験していることが今の自分の自信につながっている様子などが観察できた。

（3）就学前支援の可能性

就学前支援の可能性の追求として、愛知教育大学の幼児教育選修の学生に対しての勉強会や、保育園での子どもの言葉を増やす活動を行った結果、外国にルーツを持つ子ども達の言語能力や実際の保育現場の現状についての認識を得ただけでなく、将来保育者になった時に自らどのようなことを実施できるか考え、将来保育者として何をすべきであるかというところまで意識を向けている姿が観察された。

しかしながら、保育者と連携して園児の言語活動を向上させる活動の実施までは至らなかった。これについては、保育現場における日常の様々な問題や、保育園というものを研究者側が十分に理解できていないことが原因であったと思われる。今後の連携の在り方を探るうえで、問題点を明らかにすることができた。

これらの保育園で活動から、『外国にルーツをもつ子どもたちのためのことばをふやすもじにしたしむ　保育園・幼稚園でできる活動集』とそれに伴う教材の作成に至り、近隣の小学校や保育園に送付した。

最終年度には、シンポジウム『「子どもを支えたい」その思いをつなげる～愛教大と多様な機関との連携から～』を実施し、就学前から学齢期までの様々な機関との連携における活動紹介、意見交換を行った。参加者からは、これらの活動を参考にしたいという声や連携の意義、問題点、今後どうしたら子ども達にとって有効な支援ができるかなど多くの意見が出された。これにより、これまでの連

携の成果や、今後の連携の可能性、課題等が明らかになった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）
川口直巳、「文化の違う学校間交流からの学び ― 愛知教育大学とブラジル人学校との交流から ―」、『愛知教育大学研究報告』、査読有、第 66 輯、2017 年、31－38
http://hdl.handle.net/10424/7014

〔学会発表〕（計 3 件）
①川口直巳他 2 名、「外国人児童生徒に関する勉強会から見られる学生達の学びの様子－将来自ら支援できる保育者、教員を目指して－」、異文化間教育学会第 38 回大会、2017 年
②川口直巳他 3 名、「外国にルーツを持つ子どもたちへの就学前支援－二方面からのアプローチより－」、異文化間教育学会第 37 回大会、2016 年
③川口直巳他 2 名、「外国につながる子どもたちの就学前支援を考える－保育園での調査から－ 」、異文化間教育学会第 35 回大会 、2014 年

〔図書〕（計 1 件）
川口直巳　西山幸子　鈴木絵莉　遊佐美和子　夏目礼子　五反田智美、愛知教育大学外国人児童生徒支援リソースルーム発行、『外国にルーツをもつ子どもたちのためのことばをふやす　もじにしたしむ　保育園・幼稚園でできる活動集』、2018、27ページ

６．研究組織
(1)研究代表者
川口　直巳（KAWAGUCHI, Naomi）
愛知教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：６０５０９１４９

(2)研究協力者
丸井　合（MARUI, Ai）